

皮膚の眼<sup>1)</sup>

——国立ハンセン病資料館 2011 年度春季企画展「かすかな光をもとめて」展への批評——

阿部 安成

目 「盲人は皮膚の眼で道を知ることが出来ます」——国立療養所多磨全生園で発行された『多磨』第41巻第2号（1960年2月。同誌の編集兼発行人は同園園長の林芳信となっている）に掲載された、田代馨の「生きている限り—ある盲人の話」と題された稿にみえる1文である。わたしはこの田代のレトリックを、国立ハンセン病資料館 2011 年度春季企画展「かすかな光をもとめて—療養所の中の盲人たち」（以下、光展、と略記する）の会場で読み、この展示のなかでもっとも強く印象に残った1文としてメモに書き写した。

癩=ハンセン病にかかったもののうち、「大風子油治療の時代には、15ないし20%もの患者が失明のような重大な<sup>がい</sup>障害を起こし」たという<sup>2)</sup>。「大風子油治療の時代」とは、おおまかに特効薬プロミンの開発以前、すなわち1940年代以前を指すのだろう。失明者の率は決して低い割合ではなかった。多くの癩=ハンセン病の療養所で「盲人会」などの名を掲げた組織が結成され、そこから逐次刊行物が発行されてきたことが、失明者たちが全体からすれば少数であっても、彼ら彼女たちへのケアが小さくてよいとはならないことをあらわしている。

「癩」であることにくわえて、さらに「失明」が重なることは、当人にとってはもちろん

---

1) 本稿は2011年度滋賀大学研究推進プログラム「基盤研究」助成による研究課題「20世紀日本の病の重層（complications）と生命観の文化研究」の成果の1つである。

2) 光展展示図録『かすかな光をもとめて—療養所の中の盲人たち』（国立ハンセン病資料館編集、発行、2011年。以下、図録、と略記する）のp.43「参考：ハンセン病における視力障害」参照。なお同ページの文章は光展会場入り口で配布されている国立ハンセン病資料館館長名の「ごあいさつ」があるシートの裏面にもまったくおなじ体裁で印刷されている（ただし「ハンセン病と視力障害」）。「ごあいさつ」もまた図録p.3のそれと同文である。

んのこと、また探究者によっても、「極限の苦しみ」とうけとられた<sup>3)</sup>。光展の企画と図録の編集を担当した国立ハンセン病資料館学芸員の金貴粉は、

療養所の盲人を描くこと——それは、ハンセン病患者であることに重ね、失明という身体的な不自由さを抱えた中で生きるという困難さと、それに対する差別や偏見に立ち向かう辛さの中に生きた人々の姿を描くことである。

と理解して、光展をつくりあげた。

本稿は、癩=ハンセン病療養者にあらわれたこの重なりを医学用語にいう「complications」ととらえ、ただし、それをたんなる合併症や余病とするのではなく、癩=ハンセン病という難儀に失明という困難の契機がくわわった情況、さらには、こうした病むことにおいて複合化した病者を考えるときの構えとするものである。この小文において、光展を批評しながら、「重層 complications」という課題設定により、癩=ハンセン病を考えるときの論点を示すこととする。

**目目** 展示は会場も図録もどちらも、大きく3つのコーナー——「1. 恐怖、絶望、そして生きるために」「2. 光をもとめて—盲人たちの活動」「3. 盲人たちの今—現状と課題」——に分かれている。

(1) 会場でも図録でも最初に見ることとなる、国立ハンセン病資料館館長名の「ごあいさつ」をまず読もう。40字×21行の短い文章の書き出しは、

ハンセン病は結核とは違って、何の気兼ねもなく〈普通〉の付き合いができる病気です。と始まる。最初に光展をみたときにはまだ図録が発行されていなかったもので、会場で手にとったシートと展示パネルでこの1文をみた。一読して、ひどく配慮に欠けた口上だと感じた。とても強く、そう感じた。これでは、結核が、気兼ねが必要な、ふつうのつきあいができない病になってしまう。しかもそこにとどまらず、この1文は、結核に罹ったひと

---

<sup>3)</sup> 金貴粉「かすかな光をもとめて—療養所の中の盲人たち」(図録)。以下、金署名のある稿からの引用は典拠を「金解説」と、ほかの箇所からの引用はたんに図録とあらわす。

(びと)には、なにかしらの気兼ねが必要となり、ふつうのつきあいはできません、と読み替えられても仕方ない<sup>メッセージ</sup>通知となっている、とわたしはおもった。もちろん、必要な分離があるということは理解できる。それが病の蔓延を防ぐための処置だということもわかる。そのうえでいうと、癩=ハンセン病をふつうのつきあいのできない病にしてきた過去の過ちを、ふたたび結核において犯してしまう可能性をこの<sup>メッセージ</sup>挨拶はふくんでいるのである。

この1文のあとに続く文章をみると、そこでは、「適切に治療されれば〔中略——引用者による。以下同〕確実に治癒」することと、かつて十分な「治療薬のなかった不治の時代」には「重い後遺症を残すことがしばしばあ」ったことを示しているのだから、結核をひきあいにださずとも、ハンセン病が治る病になったこと、早期の治療により後遺症をさけられるようになったことは、医者である同館館長は容易に説明できたはずだ。結核も治る病だ。ハンセン病を説くときに結核を参照して云々する必要はない。だから、ここには配慮がない、とわたしは述べたのだ。

ただし、さきの1文には、光展の全体を考える論点が示されているとも読める。それが、レファランス～コントラスト (reference～contrast) =参照、参考、関連、対照、対比である。これについては、またのちに述べるとしよう。

「ごあいさつ」を続けて読もう。そこでは、癩=ハンセンの後遺症の「最たるもの」として失明がとらえられ、それによって「ハンセン病を患って隔離されるとき同様に、強い心理的ショックを受けたであろう」ことはあらためていうまでもないこととして、

ハンセン病に必発する知覚麻痺をもっているうえに目が見えないという、生きるための最悪な不自由を、自分自身が被った悲劇として受容することの困難は、想像にあまりありません。

と述べることで、癩=ハンセン病患者の失明が、「最悪な不自由」の「悲劇」であり、かつそれをうけいれることのむつかしさを、自分(館長)が=非当事者が、想像することもまたむつかしいとあらわしているのである。

当事者たちは、非当事者たちのそうした想像力のなさとはかかわりなく生きる。失明し

たものたちも、みずからがこうむった「悲劇」を「乗り越え」てゆくと、非当事者は観察する。

それ〔悲劇〕を乗り越えた盲人たちは、視覚に代わる感覚を鋭くし、視覚に頼らない記憶力を高める努力をはじめました。〈盲人の、盲人による、盲人のための〉文化活動の胎動です。

——癩=ハンセン病者の失明というもっとも不自由度の高い「悲劇」を当人たちが受容する困難さを想像することはむつかしいが、しかし、それをのりこえる努力としての文化活動は理解可能だ、との非当事者である観察者の表白である。

癩=ハンセン病を病むことは、1907年から1996年までの予防法体制のもとでは、とてつもない過酷な体験となった（もとより、予防法廃止とともにそれが改まったわけではない）。そこに失明が重なると、その過酷さもより深まる。それにもかかわらず、当事者たちは、その逆境をはねのけて生きた、その努力が「文化」であり、その「人生のすばらしさ」を共有しよう、というストーリー（展示方針）が同館館長によって「ごあいさつ」に提示されている。

人が生きるために、かけがえのない視力を失い、それでも、〈生きる意味〉を求め続けた盲人たちの姿を、そして人生のすばらしさを、この企画展をとおしてご覧いただけるものと信じます。〔下線は引用者による〕

——それでも、あるいは、それにもかかわらず、という逆接の接続詞が用いられる癩=ハンセン病をめぐる語られ方の典型が、ここにもみえる。まるで、癩=ハンセン病を語るときには、逆接の接続詞を用いた転換のストーリーがなくてはならない、とでもいうかのように、こうした記述があふれている。さきにみた「文化活動の胎動」も、こうした典型の記述の表現形である。その一例が「ごあいさつ」で示される。かつて1960年前後に、国立療養所多磨全生園に、そこで「最も重い不自由者の一人に、Tさんという盲人」がいた。このひとは、「柱にもたれてあぐらを組み、終日太ももを指の屈んだ<sup>(つゝ)</sup>手で叩いているのです。何もできない、何もすることのない人の、ひとつの瞑想の姿だったのでしょいか」とみうけられ

るようすから、転じて、「何もできない、何もすることのない盲人が、瞑想に籠もるのではなく、瞑想のような状態をつき破って、新しい生の動きをはじめたと思える〔中略〕例えば、文字（点字）と思想、表現の獲得が、〈和〉を求め、〈和〉をつくったこと、すなわち盲人会の活動となっていたのは確かでしょう」とうけとめられるようになる、こうした転換のストーリーを「人生のすばらしさ」とみせる構成がここにはある。

「ごあいさつ」にみえる「ひとつの瞑想の姿」「瞑想のような状態」というときの瞑想が、目を閉じてじっと穏やかに思索したり想像したりしているようすをあらわしているのか、それとも、たんに目をつむっているさまを指す比喻なのか、曖昧で判然としない。どちらともとれるものの、しかし、ここには療養所に生きる失明者に対する〈盲人観〉の1つが、はっきりとあらわれている。くりかえし記されている、「何もできない、何もすることのない」という〈盲人像〉である。

(2) つぎに、金貴粉による、いわば展示解説を読もう（図録 p.5-6）。彼女は、「永遠に光を失いながら、なお生きる輝きを求めて、真摯に生きた盲人の方々との出会い」が、「療養所の中の盲人たちをテーマに企画展を行おうとしたきっかけ」となったという。彼女が出会った療養所の盲人たちのすがたは、「自らは闇の中にありながら、生きることの鮮烈な輝きを私に見せた」と感じとられ、それはまた、「闇の中に光を認めた一瞬であったろうと強烈な印象」ともなって彼女をおおったのだった。そして、「この人たちの姿を、より多くの人びとに見てほしい。それが、本展覧会を思い立つきっかけになった」ともふりかえっている。

ここでは、光や輝きと闇（のなか）との対比がレトリックとして用いられている。

本展覧会に向けての調査の過程で、さらに多くの闇の中を生きる人のすばらしい輝きにいくつも出会った。

というぐあいだ。盲人に対して晴眼者という<sup>4)</sup>。「盲」の語には、なくなるの意味の亡の字

---

4) 図録には「めくら」、「<sup>めしい</sup>盲」、「<sup>もうじん</sup>盲人」という用語は、差別的な意味で使用されてきており、現在は「視覚障害」等の用語が用いられているが、本展覧会ならびに図録においては

があり、したがって、「ひとみがなくなる、目が見えないの意味」がある（『新漢語林』）。字義としては、暗い、目が見えないこと、見えないひと、そして、「物事や道理の分からぬこと。また、その人」を意味する。一方の「晴」には、澄みきっているの意味の字があり、「空が澄みきって日がみえる、はれるの意味」がある。晴は正であり明、盲は負となり暗となる。後者は、たんに暗い、みえない、にとどまらず、そこから派生して物事や道理のわからないこと、そのひとをも指す消極性、否定性の強い語となっている。辞書においてはこれほどに、「盲」という字はすくいあげようのない事態をあらわすとなっている。このことはまた、のちにみるとしよう。なお、癩=ハンセン病を語るにあたって、光や闇のレトリックが用いられる例は、この光展にかぎられない。たとえば、2010年には、『闇を光に一ハンセン病を生きて』（近藤宏一著、みすず書房、2010年）という書名の図書が刊行されている。

金は光展を準備する過程で、「光をもとめた人たち」と出会い、ついで、そのすがたは、「それぞれの人が失明の衝撃や絶望をくぐり抜け、受容することを経て生み出されたものであることに気づかされ」、そして、「その過程の辛苦と受容の重さを描くことがどうしても必要となった」と考えるにいたった、と明かしている。あわせて、「当時の療養所における盲人の立場についても思いを寄せなくてはならぬ」と知ったという。当時とは、「ハンセン病の有効な治療薬がなかった時代」、「全入所者の約1割を盲人が占め」たころを指す。軽症者が重症者や不自由者を看護し介護していたそのころの盲人の立場はというと、

「誰かの世話にならなければ何もできない人」、「柱にもたれ、日がな一日、虚無感の中で過ごしている人」であった盲人たちは、療養所の底辺に置かれていた。となる。それは、自死を望んでも「死ぬ術すら思いつけないむごさ」、それを「必死に生きることでもあった。ここにもさきにみた「ごあいさつ」と同様の、療養所のなかの〈盲人像〉があらわされている。「何もできない」「虚無」のひと、ということだ。

---

固有名詞ならびに歴史的事実としてその実態を伝える目的においてそのまま使用することをことわりたい」と記されてある。本稿ではその語の意味をとらえるために「盲」の語を使うこととした。

しかもこの、癩=ハンセン病と失明という重層には、そのうえになお、療養所内外からの差別や偏見も重なってくる。「戦後、活発に行われていく盲人による組織の結成や、権利獲得のための運動や文化活動」は、こうした幾重もの困難とそこで造形された〈盲人像〉からの「脱皮を意味」することとなる。べつにいうと、「絶望という深い闇の中から立ち上がり、生きる希望—「かすかな光」をもとめたもの」ととらえられたのである。したがって、あらためて、光展の「目的は、癩と失明という極限の苦しみを受けとめ、それでも生きることを求めてやまなかった人びとの強さや可能性を伝えることにある」と示されたのだった。

そこで、展示はつぎのとおり構成される。第1コーナーでは、「失明にいたる過程での恐怖や絶望、そして生きるために立ち上がろうとした過程について、手記や証言を通して伝える」——べつにいうと、絶望と虚無から「自分自身が盲人であることを受け入れること」に始まった、「自分の生を取り戻すこと」への回顧となる。第2コーナーでは、「盲人による運動と文化活動を通して、暗闇の中から「かすかな光」をもとめようとした姿を伝える」——簡潔にいうと、「人間として生きる権利をもとめる運動」と「生きがい<sup>〔ママ〕</sup>を求めてきた姿」をあらわす。第3コーナーは、「今の療養所の盲人たちの姿を伝える」——それは、「介護員などとの心的交流がより大切になってきている」現在のようすである。

金解説文では最後に、観覧者への期待が示される。「本展覧会を通じて、困難な中でも「かすかな光」をもとめ、生きぬこうとした人びとの姿を感じていただきたい」ということ<sup>5)</sup>、そして、「今、盲人の心の支えに何が必要とされているのかという点について、考えていただく」ということである。

解説において金は、光展とは、絶望という暗闇のなかで、盲人であることを受容し、そこから自分の生をとりもどし、すなわち、「かすかな光」をもとめ、ひとたび逆境をのりこ

---

5) 「生きぬく」という表現にも先行例がある。たとえば、立教大学史学科山田ゼミナール編『生きぬいた証に—ハンセン病療養所多磨全生園朝鮮人・韓国人の記録』(緑蔭書房、1989年)という書名の図書がある。「生きぬく」「それでも生きる」は癩=ハンセン病をめぐる1つの典型的表現となっている。

え、たちあがった彼ら彼女たちがなお、ひととして生きる権利の追求を運動化し、かつ、自己の生きがいをもおいもとめた——こうした盲人たちの軌跡と現在とを描いたのだ、とその雄渾な展示ストーリーを提示したのだった。

(3) ここでは展示コーナーを1つずつみてゆこう。それぞれのコーナーには、その概要または趣旨が掲げられている。これを、コーナー解説とよぼう。

第1コーナー「恐怖、絶望、そして生きるために」のコーナー解説でも、癩と失明という重層による「絶望」と「何もできない」こととが記されるというくりかえしがあるが、失明することにより、「かつて他人事であったみじめな盲人患者の姿に自分になる」という変化ないし転換も記されている。その「みじめ」さには、「光を失い、それでも失明を受け入れられずにもがく苦しみは、周囲の患者にすままったく理解されなかった」こと、「友人は離れていき、そのことがさらに孤独をつのらせた」こと、「無意識に行ってきたあらゆることが、失明によって自分一人では不可能になった」こと、「何から何まで、晴眼者の世話にならなければできない情けなさ、恥ずかしさは、自然と晴眼者への気兼ねや劣等感となって表れた」こと、「失明した患者には死ぬ術すらなかった」ことが、ふくまれる。

こうした事態を、コーナー解説は「どん底」と表現した(ただし「」がつけられた展示史料からの引用)。そこからはいあがるようすは、「おそろおそろ」の「行きつ戻りつ、少しずつ」であったという。それは、「冷笑と屈辱の中にあって、自分の生を自分の手に取り戻そうとする営み」にほかならず、「やがて自分で食べ、歩けた時、再び生きることに心の目を向けることができた」と評価されることとなり、すなわち、「暗闇に差し込むかすかな光であった」と喩えられたのだった。第1コーナーは、こうした説明の提示を経て展示へと導かれる。

このコーナーには、壁面一杯のパネルに記された文字群がならんでいる。文字による手記と証言の展示である。冒頭の1枚は、

この病者は、生きていうちに二度死ぬっていうんです。／一度はライになった時、二度めは失明した時です。〔藤本とし『地面の底がぬけたんです』思想の科学社、1974年〕



と、癩をめぐる重層を二度の「死」としてあらわす手記である。この死を「絶望」ととらえても、そう大きなまちがいではないだろう。失明を「恐怖の渦のようなもの」「急に世の中が真暗になったよう」だと喩えた手記、死を望もうにもそれすら遂げられなかったことの証言、失明後に「気兼ね」するようになり「劣等感」を感じるようになり「片意地な人間」になってしまったと語り、「辛さ惨さ」を語り「どん底」の生活だと喩えてみせる多数の手記と証言が続く。

私は太陽の光を憎悪し、呪った。かえって昼も夜もない闇黒の世界を願った。〔吉成稔『見える一癩盲者の告白』キリスト新聞社、1963年〕

——こうした自己を「精神的盲目」とみる手記も掲げられている。

パネルはだんだんと、「いらいら」しながらも「自分でできることは自分でしようと思ってやってみ」るようすへと移り、写真は1960年代から1970年代にかけての療養所で、自分で「食事をする」「靴下をはく」療養者、「雪道を歩く盲人」のすがたをみせている。

なお、図録には20の手記と証言が掲載されているが、会場の展示はこれよりも多く、冒頭にみた田代馨の「生きている限り—ある盲人の話し」も、会場にパネルがあって図録にはない手記の1つである。

ここで展示の難点をあげると、図録には引用文献一覧が巻末にあり、それぞれの手記や証言がいつのものなのかがわかるが、会場では書誌情報が著者名と書名（あるいは稿名）しかなく、いつころ書かれた文章なのか、その出典がなにかがわからない<sup>6)</sup>。いつ書かれた文章なのか、その時代を知ることは、癩、失明、療養所、療養者を理解するうえでとても重要な情報だとおもうので、それがない展示は不十分である。

第2コーナー「光をもとめて」は、さらに、「点字の体得」「盲人組織の誕生」「盲人たちの運動」「盲人たちの文化活動」に分かれる。コーナー内の見出しにもあらわれているとお

---

<sup>6)</sup> 図録に6つの手記が引用されている文献の、らい看護協同研究班『らい疾患看護の看護事例集 No.4 〈視力低下の過程にある患者の自立への働きかけ〉』（1988年）は、国立ハンセン病資料館図書室にも国立国会図書館にもない書籍である。せめて展示会場のすぐ隣にある図書室では閲覧できるとよいとおもう。

り、ここでは「日常生活」における多大な困難をかかえた「最底辺の生活」のなかで、失明者たちが互いに集り、「自らの可能性を模索し」、動きだし、「盲人会を結成」する「主体的な取り組み」が、やがて運動となり「文化活動を展開」してゆくようすが再構成されている。

この第2コーナーでは、「戦後」という時代をあらわす用語が多用されている。『広辞苑』でも「戦後」には「戦争の終わったあと。特に、第二次世界大戦の終わったあと」と記されているとおり、ここにいう「戦」とは、もちろん、戦争一般ではないのだが、時代を明瞭にあらわすためにも、第二次世界大戦後と表記した方がわかりやすい。それはともかく、「戦後」が多用されている記述の仕方をみよう。

- A. 「戦後、科学療法の登場により、入所者の中から軽快退所者や労務外出者が出始めた」（第2コーナー解説第1文）。
- B. 「戦後になり、各園には次々と盲人組織が誕生した」（「2」盲人組織の誕生」の見出しのもとでの解説第1文）。
- C. 「戦後になっても盲人をはじめ、不自由度の高い患者の収入源は、わずかな慰安金だけであった」（「3」盲人たちの運動／①国民年金の支給」の見出しのもとでの解説第1文）
- D. 「療養所は、戦後になっても患者が患者を看るしくみが続いていた」（「3」②患者看護から職員看護への切替をもとめて」の見出しのもとでの解説第1文）。
- E. 「戦後になってもこうした〔短文芸や音楽などの〕取り組みは続き、むしろその幅を広げていった」（「4」盲人たちの文化活動」の見出しのもとでの解説第2文）。

このように、第2コーナーで展示された時代は「戦後」が主となる。図録に掲載された写真と原物（の写真）で明示されている年次はすべて、1950年代以降となっている。するとさきにみた、第2コーナーの、「最底辺」からの模索と組織化、そして運動と文化活動の展開という展示ストーリーは、第二次世界大戦後、とりわけ1950年代以降の様相となってしまう。しかしこれは、実際の動向とはずれている。たとえば、図録巻末の主要参考文献一覧に見える『わたしはここに生きた－国立療養所大島青松園盲人会五十年史』（大島青松

園盲人会編、同発行、1984年)をみれば、大島療養所で「杖の友の会」(盲人会)が結成されたときが1932年だったことがすぐわかる。第二次世界大戦後どころではなくそのまえに、療養所で盲人による組織が結成されていたのだ。これは、大島で突出して先行した事態だったのか、ほかの療養所での組織化はいつころだったのか、もっとていねいに展示、解説してもよかつただろう。そうした観点からすると、せっかく提示された「各園盲人会で発行された機関誌」も、表紙、タイトル、所蔵元を記すだけでなく、その創刊年を示すとよかつた。これらの機関誌は、国立ハンセン病資料館図書室にも国立国会図書館にも欠号が多く、まとめて閲覧する機会がなかなかない文献である。もとより、書誌情報だけでなくやはり原物(複製物でも可)をみなければ、研究はおこなえないとはいえ、あたりをつけるという点でも、盲人会などの結成時期や機関誌創刊年は、盲人たちの組織、運動、文化活動を理解するうえで重要な情報となるはずである(大島青松園盲人会機関誌『灯台』の創刊は1954年)。

図録では第2コーナーの最後の頁に、「盲人による文芸作品一覧」が掲載されている。掲載された単行本の数は、俳句24点(もっとも古い発行年の図書は、村越化石『独眼』琅玕堂、1962年。村越は栗生楽泉園在住)、短歌42点(おなじく、明石海人『白描』改造社、1939年、同『海人遺稿』改造社、1939年。明石は長島愛生園在住)、詩12点(おなじく、武内慎之助『裸樹』私家版、1958年。武内は栗生楽泉園在住)、小説・随筆・評論・記録29点(おなじく、玉木愛子『この命ある限り』保健同人社、1955年。玉木は長島愛生園在住)となっている。この一覧には附記があり、「本リストの掲載は、単行本に限っています。その他、盲人による文芸作品にお心あたりのある方は当館までご一報ください」と記され、これら以外の図書があることが予想されている。明石海人がかなり希有な創作者だったのか、海人以前に盲人による創作はなかったのか、をめぐり調査が必要となる。

この第2コーナー会場では、デジタルプレーヤーを使って、長島愛生園青い鳥楽団の演奏を聞くことができる。これはよい展示である。

第3コーナー「盲人たちの今」では、副題にあるとおり、盲人たちをめぐり「現状と課

題」とが示されている。施設、設備、環境の改善は大きい。そのうえで、①「故郷の家族との絆が劇的に回復した訳ではない。根底にある寂しさは残っている」こと、②高齢化にともない「盲人たちの多くが〔中略〕個室において、独りで過ごすようになった。歳を重ねた盲人が関われる世界は確実に狭くなっている」こと、③「看護・介護する側と看護・介護される側の「心の通い合い」という質的改善が求められている」こと、があげられている。展示では、それぞれの盲人たちの日々の生活が、それぞれの盲人会の活動が、映しだされている。

**目目目** 近年の、癩=ハンセン病をめぐる歴史の資料集成や文学全集の編纂において、療養所における失明者を対象として1つの巻にまとめてとりあげる編集はまったくなかったとおもう。そうしたところでこの国立ハンセン病資料館の光展は、稀有な、貴重な、重要な試みとなった。過去に溯れば、失明者たちの団体が編んだ自分たちの活動の記録に、たとえば、前掲『わたしはここに生きた』のほかにも、多磨盲人会記念誌編纂委員会編『望郷の丘—多磨盲人会創立20周年記念誌』（多磨盲人会、1979年）、栗生楽泉園盲人会『湯けむりの園—栗生盲人会五十年史』（栗生楽泉園盲人会、1986年）、邑久光明園盲人会『白い道標—邑久光明園盲人会40年史』（邑久光明園盲人会、1995年）などがあつた。これら盲人会による史誌はべつの機会に論ずることとして、療養所に勤務した医者が記した、そこにおける失明者と文芸作品についての稿をさがすと、国立療養所の医官をつとめ、療養者の創作指導も担った内田守人（内田守）の「癩盲人の生活と其の文芸作品」（『社会事業研究』第20巻第8号、1938年）があつたとわかる。

内田は、「一般盲人」と「癩による盲人」の比率が1対100であること、後者は前者より「甚しく生活能力が低下されてゐる」ことを指摘する。すなわち、「癩盲人に於ては癩性浸潤の為に皮膚の知覚が麻痺して、点字でも練習しやうと云ふ者は極めて寥々たるもの」というのである。「所謂かんが悪くなつてゐる」ともいう。そうすると、点字を指で読むにも困難があり、したがって、まさに舐めるように舌読、唇読せざるをえなくなるのは、光展

でもあらわされているとおりでである（図録 p.14）。

なおここで、いったん本論からはずれることとする。光展図録には、療養所在園者自身によって撮られた写真にくわえて、非当事者の職業写真家による4葉の写真が掲載されている。撮影者のひとりが趙根在、もうひとりが太田順一である。太田の写真集『ハンセン病療養所 隔離の90年』（全国ハンセン病療養所入所者協議会編、解放出版社、1999年）の表紙カバーに印刷された写真が、図録に掲載された1葉とおなじ舌読のようすをとらえていた<sup>7)</sup>。多くの人びとがこの1葉によって、癩=ハンセン病の療養所での失明者の舌読を知ったこととおもう。強い衝撃力を持つ表紙の写真集だった。だが、おうおうにして、図書館というところはこの表紙カバーをはずして捨ててしまう。この所業によって、太田の写真集は様相を一変してしまった。こうした処理は、装幀者の仕事を無視した、本に対する破壊行為にほかならない。かつてはどういうわけか、逐次刊行物の合冊製本にあたって、各号の表紙が切りとられたこともあった。もうそろそろ、こうした破壊はやめた方がよい。

内田の稿にもどろう。彼の結論はつぎのとおりである。

癩盲人の開拓したる俳句及短歌は、実に「棘の冠」とも称すべく、悲痛に輝くものであって、それは直に芸術の極致に達し得てゐる。

——ここでも「輝く」というレトリックが用いられている。それはともかく、1930年代にすでに明石海人や島田尺草という歌人が登場していたところで<sup>8)</sup>、「癩盲人の生活とその文芸作品」がどのように論じられたのか期待をもって内田の稿を読んだのだが、「癩盲人の開拓したる俳句及短歌は〔中略〕直に芸術の極致に達し得てゐる」との内田の議論は、凡庸にすぎた。「癩盲人」が創作活動をおこなっていた同時代にあつて、内田によつてもその創

---

<sup>7)</sup> 太田の写真集にはもう1冊『ハンセン病療養所 百年の居場所』（解放出版社、2002年）があり、また著書『ぼくは写真家になる！』（岩波ジュニア新書、2005年）があり、そこでは「ハンセン病療養所」という章がたてられている。

<sup>8)</sup> 内田は同稿の最後に「癩短歌の高峰島田尺草を紹介する左の二文を再録」と記している。同稿は「国立ハンセン病資料館蔵書検索」でヒットする。「盲目」の島田もまた短歌をつくり、その全集が内田によつて1939年に編まれていた（長崎書店）。さきにみた図録「盲人による文芸作品一覧」にない1冊である。『島田尺草全集』も前掲蔵書検索でヒットした。島田は九州療養所に生きた。

作をうまく理解する手立てが示されていないとなると、わたしたちは過去の参照項や補助線によらずに、自分たちで「癩盲人」の作品を理解する術を模索しなくてはならない。こうした現在、光展が考察の始線となる。

すでにみたとおり、光展は「癩と失明という極限の苦しみを受けとめ、それでも生きることを求めてやまなかった人びとの強さや可能性を伝える」とのストーリーによって構成された展示だった。癩=ハンセン病の療養所における、癩と盲の重層による絶望から始まり、それをのりこえて、協同のなかでいわば主体化を遂げるという大筋が、この展示に貫通している。確かに、当事者が書き記していたとおり、この2つの重なりは死を望むほどの絶大な苦悩となった、のだろう。ただし、そうした回想はほぼすべてが、療養所の日々を生きるなかでふりかえって記された過去の一断面であるはずだ。もとより、この重層を抱えて自死に果て、なにも書き残さずに逝ったものたちもいよう。だがくりかえせば、この絶望とは、それを想起する生において記された過去の像なのだ。だから真実ではない、とわたしはいいたいのではない。そうではなくて、わたしの懷疑は、当事者のそれこそ絞り出すようにして記された手記をもとに、そこに記された内容をなぞって<sup>9)</sup>、失明者の過去を、なにもない、なにもできない、いうならば絶対の無とみてしまうところにある。彼ら彼女たちの生は、劣、欠、不、非、否などの語を用いて、あらわされることとなる。失明者となる光をうしなった当初は、当事者自身によってもそれは記しえない出来事だった。それを非当事者のわたしたちが、想像力の欠落を一方で自覚しながら、その一方で、彼ら彼女たちは絶望に沈み、なにもできなかった、とあらわしてしまうと、それは過剰な不幸をつくりだしているにすぎないのだと、わたしには感じられてならない。

癩を発病したうえになお失明してしまったものたちが、その後の生への気力を無くし、望みが絶たれたように感じたであろうことを否定したいのではない。わたしたち非当事者が、あたりまえのように、失明者をなにもできないものとみてしまうことへの疑いが、わ

---

<sup>9)</sup> 「なぞる」を論点とした議論をすでに展開したことがある（阿部安成「横浜の〈スラム〉をなぞる／に問われる」『部落解放研究』第171号、2006年8月）。

たしにはある。たとえば、光展の観点では、柱にもたれて目を閉じたまま一日を過ごす失明者の生は否定されてしまうのである。点字を学んだり、舌読を駆使したり、盲人会を組織したり、短歌や俳句を創ったり、盲導鈴や杖をたよりに歩き出したりしなければ、光展ではその生は選ばれないのである。もちろん、そのまさに一步一步は、失明者みずからが選び、力を尽くした結果であり、しかも、白眼視や無視や蔑視すらあるなかでの一歩だつたばあいもあるだろう。それは、讃えられてよい。そのうえでわたしは、それができなかつたものたちの生を、歴史のなかにどのようにあらわすのかが気にかかってしまうのだ。なにもしなかつたものたちは、みずから記録を残さず、他者による記録にも残りにくいだろうから、始めから彼ら彼女たちの生は、あらわすことが困難ではある。そのうえでなお、たとえば、柱にもたれたままの某をなにもできないものとするのではなく、柱の脇のそこに確かにいた在園者ととらえ、彼ら彼女たちのいわば浮上しにくい生を念頭にしっかりとすえたまま、療養所における生の歴史をあらわす必要があると考える。柱にもたれたままであっても、それもひとの、「癩盲者」の、生なのだ。それをも、「すばらしい」と讃えるかどうか、「すばらしい」といえないとすると、それは無視されてしまうのか——歴史の再構成をめぐる分岐が、ここにある。

**目目目目** さて、ここで本稿の冒頭でみた、田代の「生きている限り」にもどろう。稿の副題にあるとおり、田代は盲人である。「片義足の方と、二人の盲人と暮しているやはり盲人」だとのこと。彼は、結核を発症したこともある。1951年に入園したとき、彼はすでに盲目となっていた。だから、「その為に病園の様子が分らないばかりでなく、東西南北を理解することが出来」ないのだった。

本稿冒頭での引用——「盲人は皮膚の眼で道を知ることが出来ます」——これは彼自身のようにすなのではなく、多くの盲人にとっての知覚であって、彼は違う。

然し、私の皮膚は眼と同じく死んでいて何等の働きもしません。濃霧で道に迷った登山者のように、深い霧の中にいつも私は立すくんでいるのです。

そう語る彼は、「百五十人の盲人の中で、私が一番感が鈍いと云はれる」とも明かす。さきにみたとおり、医官内田の述べた「所謂かんが悪くなつてゐる」ばあいなのだろう。「皮膚の眼」すらまるで利かない、「どん底」「最底辺」とよんでもよい事例かもしれない。彼の日々「一番感が鈍い」生活の端々は、病友であるはずのものたちや看護婦には、「凶々しいつたらありやしない」「我儘」「不貞腐っているよう」とみえてしまう（と、彼は感じている）。そうするとなおさらに、「生れつき無口なのがいよいよ無口になり、それが又ふてぶてしく構えて見える」ようになり、くわえて、「顔は病気でお面のようになり、顔からは心の動きが読みとれない」（と、彼が感じてしまう）ことがいっそう、彼をとりまく雰囲気が悪化させてしまう。

ある日の夕食時に、看護婦が敷布におかずの「汁を少しこぼしたこと」があった。彼女は、「黙つていれば何ごともなく済んだのに、ご免なさいと詫<sup>ワ</sup>び<sup>マ</sup>」た。手記執筆時の時点から彼自身がふりかえるそのときの経緯は——「虫の居所が悪かつたのでしよう。私は、気を付けなければ駄目ではないかと、云うともなしにぶつぶつぶや」いた。すると看護婦は、「変えればいいんでしょ」と、詫びているのにと云つた気持があつたのか〔中略〕ムツとして云」つた。彼は、

「変えればいいとは、何という云い草だ」と私は自分でも吃驚するような大きな声を出しました。それは全く予想しなかつた事で、生れて初めての経験でした。と想起した。当時の怒りは、「盲だと思つて馬鹿にするな。すき好んで盲になつたんじやないぞ！」と怒鳴るほどとなつた。

主任看護婦さんがとんできて、私をなだめようとしてましたが、堤が切れたように自分でもどうすることも出来ません。私は早口にわめきちらし、終いには看護婦さんにでもなく、誰にでもなく、病室中に響き渡るような声で、まるで酔つたように怒鳴つていました。／「バカヤロー、バカヤロー！！」／私は怒号しているうちに、初めて人間になつたような、自己を発見したような、恍惚として宗教的なあのエクスタシーに似た世界に陥つたのです。



これが、田代の回想である。彼は極点に達した怒りを放出することにより、その一瞬が連続するような時間において、彼自身をとりもどし、彼自身となったのだ。

田代のこの憤激は、みようによっては、理不尽と映るだろう。現に彼は、「間もなく病室を出され」てしまい、「部屋の人達が云う如く、看護婦さんや病人に可愛がられる為に、歯を喰いしばつて務めねばならぬと思つています」と、療養所で生きてゆくためには悔悛が必要となったのだから。彼のこのいわば蘇生、回復、あるいは、リ・アイデンティファイといつてもよい生の瞬間は、「闇の中を生きる人のすばらしい輝き」と観察者にうけとめられるのだろうか。いや、これはまだ絶望の淵をはいあがれていない、そこをのりこえていない、だから評価前だ、となってしまうのか。

怒りの鎮まった田代は、さきにみたとおり、療養所内でかわいがられるための「務め」をどんなにつらくとも果たすことを自己に科した。だがついで記すところでは、「務めとは何を務めるのか」と、なにをすればよいのかわからないと告白しているのだ。「務め」とはなにか、との問いに続けて、

私は生きているのです。生きている限り飯を食い、糞小便もせねばなりません。そのことが私には悲しいのです。

ところどころのうちを明かしたうえで、神信心への期待も述べ、そして、

盲の目を明け、癩を癒したお方に、目を明けて頂きたいのです。心にかかっている霧をのぞいて頂きたいのです。私を包んでいるこの深い霧が晴れば歩くことが出来るのです。こんなことを云えば、益々気違い扱いにされるかも知れませんが、飯を食わねばならぬ私のこの悲しみが分らないのです。

と、彼は文章を閉じた。田代も盲が晴れることを望んでいる。自分の日々を営み、かつ、療友からも職員からもかわいがられるように「務め」を果たしながら。だが彼にはその「務め」がなにかわからない。生きることの悲しさをうったえつつもまた、その「悲しみ」がわからないのが、彼以外のほかのみななのか、それとも彼自身もわかっていないのか曖昧でよくわからない。このとき、彼はなお煩悶のうちにおいて、それを生きているのである。

こののち、彼はこの悶え、苦しみ、悩み、わからないところから抜けだせたのか。わたしはそれを確かめられていない。「生きている限り」と題された文章なのだから、このとき彼が展望を見出しえていなかったことは明らかだろうし、のちの世の観察者たちがこの文章を残した彼に「輝き」をみつけ、その「すばらしい人生」を共有しようと展示することはまずないことは、はっきりとしている。光展における彼の文章からの引用は、「濃霧で道に迷った登山者のように、深い霧の中にいつも私は立すくんでいるのです」で終わっていたのだから、彼の体験とそれをあらわした手記は、依然として絶望のままの「癩盲者」の1サンプルだったのだ。

ここで、生きぬく、それでも生きる、とあらわされる生について考えてみよう。療養所の外に生きるものたちの生に、そうした表現が用いられたらどうか。たとえば、戦国の世を生きぬく、幕末の動乱を生きぬく、戦争の時代を生きぬく、という過去の出来事の表現としてはあった。いずれも平時ではなく、騒乱のなかの生をあらわしている。いまの世では、受験戦争を生きぬく、あるいは、競争社会を生きぬく、となろうか。いや、13年連続して自殺者が3万人をこえてしまった現在であれば（2011年版『自殺対策白書』の閣議決定報道において、『朝日新聞』2011年6月12日朝刊）、生きること自体がもはや困難になっているともいえよう。さまざまな複数のハラスメントや理解をこえる言動が日常茶飯事のこととしてみられる職場で、それでもわたしはここで生きる、ということもできよう。

こうした現在の日々を生きるわたしたちにとって、すでにみた光展に掲げられた、「視力を失い、それでも、〈生きる意味〉を求め続けた盲人たちの姿を、そして人生のすばらしさをみせよう、みよう、また、「極限の苦しみを受けとめ、それでも生きることを求めてやまなかった人びとの強さや可能性を伝え」よう、知ろう、といった呼応は、切迫した状況でのとても切実に欲せられた生きる術の1つにみえてしまう。「かすかな光をもとめて」いたのは、療養所の外に生きるわたしたちだったのかもしれない。そうであるからこそ、失明という始まりが「何もできない」「虚無」と設定されてしまうのだ。極目でみつけられた窮極の悲惨な事態が「癩盲人」という生であり、そこでの難儀打開、困難克服、苦境超克と

なる生きぬいた事例、すなわち、それでも生きるとのストーリーを、わたしたちが欲したのである。

当事者の想起や回顧と、非当事者の欲望とでは、意味が異なる。わたしたちは、自分たちの苦難をこえる地平を展望するために、他者の体験をただなぞるのではなく、それを編みなおしたうえでわたしたちのまえにあらわす(represent)くふうが必要なのではないか。

ここで、レファランス～コントラストという構えをとりあげよう。さきにみたとおり、光展では結核を参照して、癩=ハンセン病がそれよりは気がねのいない、ふつうのつきあいができる病だと示していた。光展ではまた、療養所のなかの晴眼者に照らすと、盲人はそれよりも過酷な境遇を生きなければならなかったとあらわしていた。ここには、病を、もう1つべつな病や症状と対比して考える観点がある。結核はいまでも感染者が数千万人もいる「再興感染症」であり、「新たな視点を用いた結核対策の推進が不可欠」なのだ<sup>10)</sup>。他方で癩=ハンセン病は、いまでは結核と違って制約の必要がなくなったが、かつては絶対隔離といわれるほどに徹底した隔離の対象となる病であり、しかもその病者のなかにも、さきにみた内田の表現を使うと「癩盲人」という重層としての絶望がある。光展は、癩=ハンセン病は、現在の結核以上に悲惨であり、癩=ハンセン病によって盲人となったものの生は晴眼者よりもいっそう過酷な絶望とあらわし、そこを始まりとして、克己と協同でそれをのりこえた「人生のすばらしさ」を発信する展示だった。光展での、レファランス～コントラストは、ここまでだ。

田代の「生きている限り」と題された稿は、この参照や対照の層がもっと多くなるとう

---

<sup>10)</sup> 公衆衛生審議会結核予防部会は1999年6月30日付の「21世紀に向けての結核対策(意見)」において、「我が国のこれまでの結核対策をそのまま進めるだけでは再興感染症としての結核に対処していくことは不可能であり、結核対策の原点に戻って基本的な対策を着実に進めるとともに、新たな視点を用いた結核対策の推進も不可欠である」と記していた(厚生労働省ホームページ。2011年7月9日閲覧) NHK「ためしてガッテン」ホームページには、2008年1月16日に放送した「なぜ今!?目覚める結核 感染者2800万人の真実」をめぐって「かつて、年間15万人近くが亡くなった「結核」。過去の病気かと思いきや、今でも日本に感染者が2800万人もいると言います。しかも、若者にまで感染が広がったり、薬の効かない「耐性菌」が生まれるなど、新たな危険もあります」と記されている(同前閲覧)。

ったえていた。盲人のなかにも「皮膚の眼」がはたらくものとそうでないものがある。その眼が利かないものは、「感が鈍い」ということで、それを自覚するものはそのうえになお、「頑固」「我儘」「不貞腐っている」「ふてぶてしく構え」てると他人からおもわれていると感じてしまうのである。展示パネルにもあり図録にも載った手記のなかの文言——「精神的盲目」につうずる自己貶視もしくは自己懲罰といってよい感覚である。

確かに展示と図録においても、盲人への「周囲の患者」の無理解があるなかでの、盲人による「晴眼者への気兼ねや劣等感」も示されていた。ただし光展では、それも「たたか」って克服すべき、いわば闇の感情となってしまう。田代のように、幾重もの劣等感に落ち込み、怒りの発出に自己を見出してしまい、生きているその日々の1 齣ひとこまが悲しみであるといわざるをえないころもちは、精神の不健全と診断され、それに克って、「人生のすばらしさ」をみせなさいと叱咤し激励する仕組みが光展にはある。

田代のうったえは、ひとまず、二分法の対照ではなく、よりいっそうの重層において考察せよとの勧めとなる。では、「一番感が鈍い」、自分自身をも責め苛み、怒りをぶちまけ、悲嘆に暮れる田代の位置を「最底辺」と確認すれば、それでよいのだろうか。おそらく、そうではない。田代を読む、とは、つい彼を最底辺に位置づけたくなるその欲望を脱し、また、「癩盲人」が示す笑い<sup>11)</sup>によって彼の陥った閉塞を打破するのでもなく、……とここで考察がとぎれてしまった。

### 3日後

ここには、さきに記した、「他者の体験をただなぞるのではなく、それを編みなおしたうえでわたしたちのまえにあらわす (represent) くふう」(p.19) を提示しなくてはならないのだが、いまのわたしにはまだ、それを明快に記す手立てがない。いま、1つ、はっきりと感じている点は、記録を継ぐということである。光展の観点からすると、絶望の淵に沈む

---

11) 白い冷蔵庫を看護婦とまちがえてお辞儀をしたと記した手記がある。

最底辺におかれ、そこからの克己と協同を自己実現するだけの「癩盲人」像をみせるのではなく、日々の悲しみを生き、怒ることに自己を見出す生の記録を継いでゆくこと、また、なにもないとみえてしまう、あるいは、なにもない生そのものを記録して伝え継いでゆくこと、である。療養所のなかの人生を「すばらしい」と表現し、それを讃えるとき、この讃辞はすべての療養所在園者にむけられているのか、そのうちの一部なのか、一部としたときそれがなぜ称讃の対象となるのか、それ以外のものたちはなぜ称讃されないのか、あるものたちを称讃しないその仕組みはどうなっているのか、についての自覚があった方がよい。彼ら彼女たちの生は、療養所外のわたしたちが評価するか否かにかかわらず、そのなかに確かにある。その在園者の数ほどある生は、当事者による、また、療養所外の観察者による評価によって選別され、選ばれた生だけが記録されてきた。もとより記録に選択性はつきものでもある。記録された生を精査することにより、また、記録される生の数を増やすことにより、記録という技術の仕組みを再確認し更新してゆくことが可能となるだろう。それはまた、歴史の書き直しと歴史の見方の見直しとなる。「癩盲者」の生はそのためであったのではないのだが、わたしたちは他者の生と死を参照して、彼ら彼女たちとわたしたちの歴史の書き方を手探るよりほかに、手立てがないのである。

今回は、ひとまず、ここまで。(2011年7月10日脱稿)

### 【追記】

本文でも示した、「癩盲人」の明石海人による歌集『白描』に、「声」と題された2首があり、1首めには「ヘレン・ケラア女史の放送を聴く」と、2首めには「我が手足の麻痺症状のすでに久しきを思ひつつ」の添えがきがあり、後者で

この語る声も言葉も悉く皮膚より得てしその皮膚のよさ  
とうたわれているのをみた。

なお、「白描」とは、毛筆による墨線だけで描いた画をいう（かつてわたしは、「白猫」とまちがえて記したことがあった）。

「白描」と題された歌集の「跋」文は、内田守人の執筆による。彼は記す——「癩者に三大受難があるが、それは発病の宣告と、失明と、気管切開とである」——この「三大受難」を身にうけたものは、癩発病者の3%くらいだという。そのなかのふたりとなる明石も、そして島田尺草も、希有な歌人といえよう。この三大受難者のひとりを軸に、人目をひく突出した事例をいわば看板として展示を編成することもできただろうが、そうせずに、(本稿本文で論じた難点があるとはいえ)、より広範に「療養所の中の盲人たち」の生をみせようと努めたであろう姿勢は、見習おうとおもう。

その一方で、おなじ国立ハンセン病資料館内で同時期に、塔和子を取りあげた「いのちの詩—塔和子展」が開かれていたことには、違和を感じた(同館1階ギャラリーで5月21日から6月26日まで「塔和子の会」との共催)。ギャラリーには、よく知られた女優から贈られた胡蝶蘭がおいてあった。わたしは、塔の詩やその創作に疑義を感じているのではなく、彼女をとりまくようすをきちんと考えたいとおもっている。その作業はまたべつの機会におくるが。(2011年7月18日記)